

平成 21 年度景観サポーターの活動紹介「まち歩きで発見できたこと！」

「景観サポーターは、伊勢崎市の良好な景観形成活動を支援するため、市から認定登録され、種々の活動をしています。」

『同聚院から西町界限』を歩く

平成 21 年 6 月 21 日（日）と 7 月 11 日（土）の午前中、景観サポーター 9 名と市の担当部署職員 3 名の計 12 名で、城下町時代からの歴史を受け継ぐ旧市街地である同聚院から三光町（旧西町）界限を歩き、歴史的な景観資源について学びました。2 回に分けて、いせさき明治館、伊勢崎神社、相川考古館、旧時報鐘楼、赤レンガ塀、街中に残る雁木折りのなごり、中台寺、伊勢崎駅、同聚院の武家門と大かや、そしてレンガトンネルを廻りました。

長い歴史が刻まれている当地区には、城下町としての歴史に始まり、明治以降の近代化や近代産業としての織物の歴史を写し込んだ様々な記憶が、まだまちのそこかしこに残されており、まちの DNA として、伊勢崎らしい景観の貴重な資源であることを、実感することができました。

歩いた感想として、「新たな発見がたくさんあり、知らないことがたくさんあることを実感した」「まちの穴場を紹介するマップを作成してみてはどうか」「お休み処や何かが体験できる仕掛け、訪れてみたいと思わせる仕掛けが欲しい」「レンガトンネルは、徳江製糸場や伊勢崎の織物の歴史を知る上でとても重要だ」「そこに行ったらその内容がわかるような表示が必要」「五感で感じる景観を味わえる場所の紹介をしたらどうか」等、発見の喜びと、それを伝える仕掛けの必要性を訴える意見が多く出され、有意義な二日間となりました。

■いせさき明治館（黒羽根内科医院旧館）



明治 45 年(1912)に今村医院として建てられた伊勢崎を代表する木造洋風医院建築。洋館としての質の高い装飾と和洋折衷の設えが随所に施されています。

■伊勢崎神社



歴史は古く 13 世紀まで遡り、この地の鎮守神として建てられたとされ、以前は飯福神社と呼ばれていました。本殿は 1848 (嘉永元) 年の建築とされ手の込んだ彫刻が随所に施され、目を見張るものです。

■相川考古館



昭和 25 年(1950)に開設。江戸時代の町役人の居宅(脇本陣)である当時の建物がそのまま展示に使われています。創始者相川之賀が多年に渡り収集した資料を展示し、国指定重文の埴輪 4 点等があります。

■旧時報鐘楼



県内最古の鉄筋コンクリート造の建造物で、大正 4 年(1915)当時、横浜で貿易商を行っていた伊勢崎出身の小林桂助の寄贈によるものです。外壁の赤レンガ積みやドーム屋根が西洋文化に憧れた大正人のロマンを今に伝えています。

■街中に残る赤レンガ塀



詳しい調査はされていませんが、恐らく大正期くらいにつくられたと思われるレンガ塀の一部が残されています。イギリス積というレンガの積み方で、洋館づくりの建物と共に美しい景観を創り出しています。

■同聚院の武家門と大かや



初代伊勢崎藩主稲垣長茂時代の遺構と伝えられる武家門（市指定重要文化財）の他、樹齢約 600 年と伝えられる大かや（市指定天然記念物）などがあります。

■雁木折りのなごり



伊勢崎陣屋北辺の地形等を、今の道の形に残しています。雁木折り(クランク道路)とは、敵から攻められた時、横合いからも弓矢・鉄砲を射かけて敵を撃退する軍事上の防御形態のことで

■レンガトンネル



かつて徳江製糸場の女工さんたちが多く通行していたという図書館の北の住宅街の中に残されている味わい深いレンガ張りのトンネル。当時の情景を垣間見ることが出来ます。

(記録 栗原)

『景観の視点場を求めて』

平成 21 年 9 月 5 日 (土) の午前中の約 2 時間、メンバー 11 名と市の担当部署職員 3 名で赤石楽舎を起終点として下記の建造物や場所を見学し、それぞれの歴史を学習し、景観視点場を確認しました。メンバーの中にはいにしへの記憶が走馬灯のように蘇った方もいたようです。なお、視点場とは良好な景観を眺められる場所のことです。

■伊勢崎河岸の石灯籠



伊勢崎河岸の石灯籠

伊勢崎河岸は広瀬川に寛文年中 (17 世紀) に設置され、当時は江戸との通商で水運が栄えていました。この石灯籠は文政 2 年 (1819 年)、武孫右衛門、瀬川太兵衛が願主となって建立したもので、その当時の事情 (船運の安全祈願) を伝えています。昭和 47 年 (1972 年) に現在地に移転。市指定重要文化財に指定されています。



■永久橋：昭和 47 年 (1972) 完成。明治時代、石舟の作とされる「伊勢崎八景」に木造の永久橋が描かれています。

■連取町周辺：伊勢崎八景の中で「連取夜雨」として描かれています。

■新橋：昭和 56 年 (1981) 完成。「伊勢の前」通りに繋がる人道橋。河川敷の広瀬川遊歩道沿いは季節にはアジサイで埋まります。

■「伊勢の前」通り

江戸時代には現在の新橋辺りが船着場で、「伊勢」神社の前に位置していたことから、「伊勢の前通り」と呼ばれ、この西には木橋が架けられ、前橋方面への街道筋でした。付近の小字名が伊勢前 (いせさき) で、一帯が「伊勢崎」と呼ばれるようになり、このことから「伊勢崎」の発祥の地とされています。

かつて、この通り沿いに映画館や商店街があり、とても賑わっていたそうです。今でも、新橋から「伊勢の前」通りを眺めれば、当時を偲ぶことができます。

■まちかどステーション広瀬

広瀬川の新開橋右岸たもとのバスターミナル。広瀬川サイクリングロード利用者やバス利用者の休憩所になっていて、あずま屋付近から広瀬川や赤城山の視点場を求めることができます。

■新開橋

平成 7 年 (1995) 新橋架け替え。バルコニーやベンチが設置され、広瀬川や赤城山の視点場を求められます。広瀬川は「伊勢崎八景」にも「広瀬帰舟」として描かれています。



伊勢の前通り



新開橋から眺める広瀬川と赤城山



■大甘堂：創業 120 年の老舗の焼きまんじゅう屋。「まちかどステーション広瀬」で焼きまんじゅうを味わい、「味覚」も街中景観の要素であることを確認しました。また、街中散策コース沿いに茶屋やレストラン等があれば集客に効果があるという意見も出ました。



(記録 上岡)

『五感で感じる故郷の景観』

平成 21 年 11 月 7 日（土）午前中の約 3 時間、メンバー 13 名と市の担当部署職員 3 名、また講師として小林享さん（前橋工科大学教授）を迎えて赤石楽舎を起終点とし「旧時報鐘楼→いせさき明治館→伊勢崎神社・本光寺」を歩きました。

歩く前に、「感じ方」の表現手段として「感覚環境発見シート」の使用方法的説明を受け、参加者は 2 班に分かれてまち歩きを実施しました。

「感覚環境発見シート」には

- (1) 「見るもの」（視覚）を記入
- (2) 1 分間目を閉じて感じた「音（聴覚）、香り（嗅覚）、熱（触覚、皮膚や肌の感覚）」を記入。
- (3) 目を開けた瞬間に感じた「光（視覚）」を記入
- (4) その場全体の雰囲気「複合的感觉（心）」を記入
- (5) 何でも気付いたことや提案などを記入。

まち歩きの後、各班が下記の間所を選択して参加者の記録を整理して発表しました。

【1 班＝旧時報鐘楼】

→
まちのシンボル、旧時報鐘楼。良好な視点場を探すことが難しい。
（鐘楼の南西側の歩道から）



←
鐘楼の南側の歩道から観察するメンバー

キャッチコピー：「まちなか歴史広場—過去と未来の出逢うひろば—」

意見：七五三の記念撮影を行う家族がいて街のシンボルであることに気付きました。ただ、周囲の道路や電線等の現況から視点場を得ることが難しく、新旧の建造物も調和していない。南側の織物会館内の庭園と一体化し、「まちなか歴史広場」として整備できないかという意見が多く提出されました。

【2 班＝伊勢崎神社周辺】

キャッチコピー：「芭蕉碑に 気付く人なし 七五三」（星野正明さん作）

意見：七五三のお参りで賑わっていて普段の雰囲気とは異なっていました。綿菓子や焼きまんじゅうの匂い、人の声や歩く音など、この行事に伴うものが目立ちましたが、目を閉じれば鳥の声を聴き、手水鉢の水に反射する光や樹木の木漏れ陽に気付き、境内の厳かな雰囲気を感じることができました。



七五三で賑わう伊勢崎神社



露店商が並ぶ参道



手水鉢の水に反射する光

【小林教授の講評】

今回、多くの皆さんが共通なものを感じていることが分かりました。これに新たな要素（イベントや季節感、音や光の景観）を加えてデザインを発展・更新させるのもよい。地域の交流の場（橋詰、街角、神社など）をきちんとデザインし、広げてつなげることにより、心地よい空間が生まれるでしょう。

（記録 上岡）

景観サポーター情報紙「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。

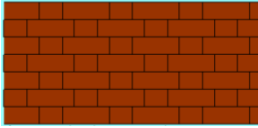
景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね（美尋）、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

『レンガ建造物の見学』

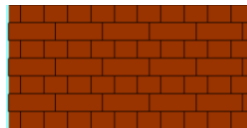
平成 21 年 12 月 5 日（土）午前 9：00～12：00、景観サポーター12名と市の担当部署職員 3 名の計 15 名が参加。見学した施設：①伊勢崎メモリードホール ②旧富士重工業(株)伊勢崎製作所第二工場のレンガ壁 ③旧国鉄両毛線レンガ橋梁の三か所でした。

代表的なレンガの積み方には、フランス積とイギリス積の二種類があります。群馬県内でフランス積の代表は「官営富岡製糸工場」が挙げられます。イギリス積といえばわがまちの「旧時報鐘楼」となります。

*** 積み方の違い ***



【フランス積】一行に長手、短手が交互。江戸時代から明治 10 年頃(1868)まで。



【イギリス積】一行ごとに長手と短手が交互。明治 20 年頃より主流となる。

大正 12 年(1923)9 月 1 日の関東大震災で、レンガ建造物が大きな被害を受け、以降小規模建造物を中心に用いられることとなりました。

■ 太田町、伊勢崎メモリードホール（イギリス積）

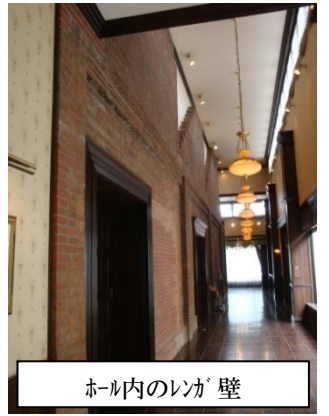
関東大震災後の昭和 9 年に建造された唯一の「レンガ造」の建物であった「旧上毛撚糸工場」のレンガ壁をそのまま取り込んだ建物です。

□サポーターの感想

- ・歴史的な建造物を残していけたら良いなと感じました。
- ・建造物は、何でも古くなったら壊せばよいというものではなく、残せるものは残してゆくことが大切なのではないでしょうか。
- ・レンガ建造物の歴史的な意義を知ることができましたが、このような情報を発信していかないと歴史的建造物がだんだん無くなってしまわないかと思えます。



ホール内のレンガ壁・ノキリ部



ホール内のレンガ壁

■ 旧富士重工業(株)伊勢崎製作所第二工場のレンガ壁（イギリス積）

明治 45 年（1912）に「上毛撚糸工場」として竣工、昭和 18 年（1943）に「中島飛行機製作所」に売却。戦後は、富士自動車工業（富士重工・伊勢崎製作所）となり、スバル 360 がこの工場で作成されました。

□サポーターの感想

- ・歴史的遺産の保存・活用は、その土地の土地らしさを表現するものだと思います。
 - ・これらの建造物は、市民に少しでも知ってもらえるような工夫が必要だと感じました。
 - ・昔、富士重工業の工場見学をしました。独特の空気が漂っておりスバル 360 を生産していた時間そのものが、その鉄骨工場の中に注ぎこまれていると感じました。
- ←門の取っ手に何故「武田菱」の家紋があるのでしょうか？



保存された第二工場レンガ壁



■ 旧国鉄両毛線レンガ橋梁（イギリス積）

旧国鉄両毛線は明治 22 年 11 月に開通しました。生糸や絹織物を運ぶ産業鉄道として多くの人や物を運んできました。このレンガ橋梁もおよそ 120 年の歴史をもっています。

□サポーターの感想

- ・残念なことに両毛線のレンガ橋は、市民が気付かにくい場所にあり、これらの建造物を多くの方々に少しでも知ってもらえるような工夫が必要だと感じました。

*** 今回の見学を終えて ***

たった一つ「レンガ建造物」に焦点をあてた見学会なのに、「伊勢崎の歴史や日本の近代史」に少しだけ触れる事が出来ました。その時代の先端を突き進む人々の息遣い、歓喜の声が少しだけ聞こえてきそうでした。まさに温故知新。私達は百年先の伊勢崎市民に何を残し伝える事が出来るのでしょうか。景観サポーターの役割は、とても重要なポジションにあると感じる事が出来ました。（記録 佐藤よ）



両毛線豊城地内の橋梁